

選抜優勝大会（ウィンターカップ）の歴史と静岡県予選の歩み

【改訂版】

文=中島 洋己（県協会広報委員長・県立科学技術高校教諭）

第70回全国高校バスケットボール選手権大会静岡県予選が平成29年10月21日に開幕する。そして男女優勝校が12月23日に東京体育館で開幕する全国大会に出場する。この大会は昨年まで47年間「選抜優勝大会」として親しまれてきたが、今年から従来全国高校総合体育大会（インターハイ）と兼ねて行われてきた「選手権大会」を分離し、より大会の権威を高めるために選手権を単独で開催することとなった。昨年度が第47回で今年度いきなり第70回となり驚いた方々も多いだろうが、これはインターハイの回数に合わせたからである。「新・選手権元年」の今年度はまさにこの大会が名実ともに「高校バスケの最高峰」となった記念すべき年である。もちろん「ウィンターカップ」という通称名は引き続き使用されることになった一方で、長年親しまれてきた「選抜大会」の名称が47年の歴史に幕を下ろしてしまったことに一抹の寂しさを感じるファンも多いかもしれない。

ご存知の通りウィンターカップは、サッカーの「選手権」、バレーボールの「春高バレー」、ラグビーの「冬の花園」とともに「冬の高校4大スポーツ大会」と位置づけられている。選抜大会時代から数えて今年で48年目になる歴史は70年を数えるインターハイよりも浅いが、3年生が出場できる最後の大会となるこの大会がまさに高校生活の集大成と位置づけられている。特に静岡県の場合、インターハイには男女共2チームの出場枠を持っているが、ウィンターカップは男女1枠、つまり優勝チームのみが東京体育館のコートを踏むことが出来るという、インターハイ以上に出場が難しい大会である。指導者・選手達にとっても、この「ウィンターカップ」という言葉を聞くと心が引き締まるような特別な思いが込み上げてくるはずだ。

まずこのウィンターカップ（選抜大会）の歴史を簡単に説明したい。昭和46年3月に第1回大会が国立代々木競技場第二体育館で開催された。当時は東北・関東など各ブロックで行われる予選を勝ち抜いた16チームのみが全国選抜に出場することができ、東海地区は男女各1枠しかなく、県予選で優勝しても東海選抜大会で敗退したらその年の静岡県代表の出場がない場合もあった。昭和50年から出場枠が各24チームとなり、それに伴い東海地区の出場枠も男女各3チームとなった。ただ昭和63年12月の第19回大会は東海地区の女子が1枠増となり、誠心（現浜松開誠館）が東海選抜4位で悲願の初出場を決めた。逆に平成元年は東海地区男子が1枠減となり、初出場を目指した沼津学園が県選抜で優勝を飾りながら東海選抜3位、全国選抜出場を逃すというドラマもあった。このようなブロック予選を経て全国選抜に出場という形はこの平成元年まで続いた。

その間、劇的な変化も起こっていた。それまで年度末に開催され、1、2年生のみの新人戦形式となっていたこの全国選抜が昭和63年3月の大会を最後に年末12月に以降、冬休み中の開催となり同時に3年生も出場できるようになった。インターハイ、国民体育大会（国体）を戦ってさら

に技術を磨いた最上級生のプレーが見られるようになり、明らかに大会のレベルも上がった。平成2年からはブロック予選をなくし、出場チーム数を大幅に拡大、47都道府県代表各1+開催地(東京)1の合計48チームとなった。それに合わせ大会の通称名を「ウィンターカップ」とし、以来この呼称が高校バスケット最高峰の大会として完全に定着している。

ウィンターカップが最大の盛り上がりを見せたのは平成10年の第29回大会だった。**能代工業**(秋田)が史上初の高校9冠を達成、**田臥勇太**ブームもあり観客の入場制限が行われるなど、いわゆる高校バスケットの『人気飽和状態』がピークを迎えた。その後平成21年からその年のインターハイ優勝・準優勝チームにも出場権が与えられ、男女各50チームとなり現在に至っている。

ここで開催地と各都道府県の予選についても触れてみたい。開催地は前述の通り、昭和46年から平成5年までは代々木第二体育館をメイン会場に行われた。その間昭和63年3月の第18回大会だけは**神戸**で開催された。平成6年は東京体育館、平成7年は代々木第二体育館で行われ、平成8年からは東京体育館に定着、平成24年のみ**広島**での開催となったが、東京体育館は20年以上、ウィンターカップの**聖地**として、高校バスケット選手たちのあこがれの的であり続けている。県予選の会場は、**新居町民体育館**、**吉田町総合体育館**、**浜松市体育館**、**沼津市民体育館**など地方の体育館をメイン会場としてきたが、平成13年から5年間は**静岡市北部体育館**、そして平成18年から現在までは藤枝市の**静岡県武道館**がメイン会場となり、県武道館はウィンター出場を目指す県内高校生のあこがれの場所、そして聖地となっている。また予選の方法は各都道府県の判断に任されていて、関東地区のように上位4校のみで行うまさに「選抜大会」と言える方法や、上位8チームまたは16チームのみで行っている地域、そして現在の静岡県のように地区予選なしで全チーム参加の県予選を行っているところもある。

前置きが長くなったが、ここからは静岡県の選抜優勝大会の歴史をたどっていききたい。昭和46年に始まった選抜大会だが、当時は地区予選・県予選を1月に1、2年生のみで行っていたため「新人大会」も兼ねた大会として始まった。初の県予選優勝チームは男子・浜松商業、女子・浜松市立。しかし当時は全国選抜に出場できるのは東海選抜に優勝したチームのみ。浜松市立は見事東海選抜でも優勝し、県内初の全国選抜大会のコートを踏んだチームとなった。一方の浜松商業は東海選抜で**四日市工業**に敗れ、全国選抜出場はならなかった。だがその**浜松商業**は昭和49年の第4回大会で県内男子初の全国選抜出場を果たす。このように**坂田勝利**率いる浜松商業は選抜大会開始直後の静岡県高校バスケット界を牽引する存在だった。昭和54年に坂田が浜松北に転勤するまでに県選抜制覇4回、全国選抜出場3回を数えた。以後は長らく栄冠に見放されていたが、平成11年に坂田の教え子・**加藤佳充**が監督に就任、**菅川浩樹**、**石谷優二**など恵まれた戦力を生かして平成14、15年と県選抜を連覇。私学全盛の平成時代に公立高校として最後まで優勝争いに絡み、孤軍奮闘を続けた。

その後、男子バスケット界も名将・**大石功**が黄金期を築きあげた**浜松西**、**興誠**など西部地区の高校が上位を占め、特に昭和62年には浜松商業、興誠が東海選抜で上位に食い込み、初の男子2校全国選抜出場を果たした。なかでも**興誠**(現浜松学院)はOBの**石川友康**が指揮官としてチームを一か

ら作り上げ、昭和56年から県選抜3連覇、59年こそ賜杯を静岡に譲ったが、60年から再度4連覇。この7回の優勝時にはすべて全国選抜出場を果たしている。さらには後藤正規、辻村浩など後年日本代表に選出された選手も輩出し、まさに昭和末期を疾風のように駆け上がってきた。ただこの全盛期の興誠をしても全国選抜を勝ち抜くのは至難の業で、今まで5回準々決勝進出を果たしているが、すべて厚い壁に跳ね返されベスト8止まりになっている。平成に入ってからこの石川の教えは後年監督を引き継いだ村上幸哉や現監督の森下貴之に受け継がれ、昨年森下の手で15年ぶり、そして現校名・浜松学院として初めてのウィンターカップ出場を果たした。

同時期に女子で一時代を築いたのが浜松市立。榎本行宏が大学卒業直後から33年間一貫して指導し続け、最後の3月開催となった昭和63年までに県選抜優勝、全国選抜出場ともに7回。特に昭和52年は県選抜2位ながら東海選抜で3位を勝ち取り全国選抜に出場、昭和59年には全国ベスト8に導いた。

同じく高校女子バスケ界を盛り上げた静岡精華（現静岡大成）も県選抜優勝、全国選抜出場ともに3回を数えたが、全国選抜での勝利は果たせなかった。浜松市立同様公立の女子校だった清水西は川崎健三が県内屈指の強豪校に育て上げ県選抜を2度制覇したが、ついに全国選抜の舞台を踏むことなく現在に至っている。西遠女子学園も知将・鈴木勝郎のもと、県制覇2回、インターハイ出場も3回を数えるが県選抜では最高が準優勝、ウィンターカップ出場を目前にしながらか涙を吞んだ。

男子の興誠のように昭和後期から平成初期の女子バスケ界を突如席卷したのが市立沼津。昭和56年にいきなり県選抜準優勝を果たすと翌57年には優勝。全国選抜でも初出場ですぐのベスト8に入った。青木良浩がカリスマ的な指導力で選手の心をつかみ、平成9年に静岡商業に転勤するまで実に9回の県選抜制覇を果たしている。特に昭和63年3月の神戸開催では全国4位、12月の東京開催では3位。県勢長年の悲願・ベスト8の壁を突破し、初のメインコートへと導いた。翌年の大会でも3位。全国選抜出場9回のうちベスト4以上が5回、そして秋本恵、原久美子、木下あゆみら総勢5名の選手を大会ベスト5入りさせている。青木の転勤後は大畑昌己が引き継ぎ、平成21、22年には県選抜連覇を果たした。

平成に入り大会名も「選抜優勝大会」同様「ウィンターカップ」の愛称でも親しまれるようになり、静岡の高校バスケも新たな力が台頭してきた。男子は沼津学園（現飛龍）、女子は常葉学園（現常葉大常葉）。西部地区に押されていた中部・東部地区が頭角を現してきたのである。沼津学園は平成元年の県選抜初制覇のあと、平成5年にウィンターカップ初出場を果たした。指導者の杉村敏英が平成21年沼津中央に転出するまでに県選抜優勝7回、ウィンター出場6回、最高順位は平成8年の全国ベスト8。杉村は加藤吉宗、高原純平、種市幸祐、大石慎之介など長年プロのトップリーグで活躍する選手を育成し、名伯楽ぶりも発揮、東部男子の発展にも大いに貢献した。

常葉学園は昭和62年に小前宏史が着任。4年目の平成2年に初の県選抜制覇を果たすと以後2度の5連覇を含む県選抜優勝16回と圧倒的な強さを誇る。この優勝回数は男女通じての最高回数で、島田智佐子、名木洋子などWリーグや日本代表で一線級の活躍をした選手を数多く育て上げた。

さらに特筆されることは何と言っても平成14年（この年女子は正月開催となったので厳密には平成15年1月）、県勢初のウィンターカップ優勝を果たしたことである。**櫻田佳恵**、**山田未来**、**三浦歩惟**らの活躍で超満員札止めとなった代々木第二体育館での決勝戦、**中村学園女子**（福岡）を65-54で破り、総体・国体・ウィンターの**全国3冠**を達成した試合は静岡県高校バスケ史上最高の名勝負として今でも多くのバスケファンの脳裏に焼き付いて離れない。現在もOGの**田中真樹**、**風間緑**、**根本葉瑠乃**などが第一線で活躍を続けている。平成の女子バスケ界は全国選拔出場11回を誇る市立沼津、その市立沼津を離れた青木が指導し平成11、12年と連覇を果たし12年には全国4位となった**静岡商業**、平成10年優勝の**静岡女子**、**能戸茂樹**が長年の指導を实らせ平成15年に悲願の初優勝を飾った**沼津中央**、そして女王・常葉学園の5校で賜杯を分け合う状況が続いていたが、昨年**三島正敏**監督のもと**浜松開誠館**が見事初優勝。四半世紀以上優勝のなかった西部地区女子に昭和61年の浜松市立以来、実に30年ぶりの賜杯をもたらした。28年ぶりに出場したウィンターでは全国ベスト8、十分に県代表の責任を果たした。

平成18年、興誠・飛龍・浜松商業の男子3強の戦国時代に突如参入したのが**藤枝明誠**。指揮官に昭和後期、**昭和学院**（千葉）女子で全国制覇7回の偉業を遂げた**西塚建雄**を迎え、県外選手や中国人留学生を招くなど巧みなスカウティングで就任2年目には早くもインターハイ出場を果たす。その年には県選抜準優勝、翌19年には見事優勝しウィンターカップ初出場を果たし、以後3年連続で出場、平成21年にはベスト8。オフェンシブなバスケが魅力のチームで特に平成20年第39回大会2回戦・海部（徳島）戦でチームが162得点の大会新、そして**藤井祐真**も一人で79得点。昭和47年に**北原憲彦**（明大中野）が記録した58得点を36年ぶりに更新、現在でも47年間の歴史に燦然と輝く**1試合個人最多得点記録**、まさに不滅の金字塔である。平成24年には**札幌創成**（北海道）で女子をインターハイに5回導いた**三上淳**が着任、25年の大分インターハイで見事準優勝、同時にウィンターカップ出場も決め静岡県男子に出場枠をもう1枠呼び寄せた。11月の県選抜は決勝戦のみ出場。「試合勘」という点で心配されたが、「県代表」沼津中央にも圧勝し改めてその実力を証明した。ウィンターカップでも堂々の4位。史上最年少で日本代表候補に選ばれた**角野亮伍**を核としたバスケットは静岡県のレベルの高さを証明した。その三上は27年2月に51歳の若さで急逝、3年間という短い間だったがその抜群の指導力は静岡県の高校バスケ界に大きな影響を与えた。

現在、浜松学院・飛龍・藤枝明誠と4強を形成するのが**沼津中央**。飛龍を長年率いた杉村が平成21年同校に着任し強化に着手、県内初のセネガル人留学生・**シェリフ・ソウ**を中心とした高さのバスケで平成22年藤枝明誠の4連覇を阻止し初栄冠、ウィンターカップにも初出場を果たす。その後平成25年まで4年連続出場。2度目の出場となった平成23年のウィンターカップは県勢男子初のベスト4進出。これまで浜松西、沼津学園、興誠、藤枝明誠が8回跳ね返されてきた準々決勝の壁を突破。惜しくも準決勝で日本代表・**渡邊雄太**を擁する**尽誠学園**（香川）に敗れたが、3位決定戦で名門・**福岡大大濠**（福岡）に快勝、見事3位入賞を果たし、シェリフ・ソウも県勢男子初の大会ベスト5、**リバウンド王**、そして**得点王**に輝いた。この成績が現在まで県勢男子のウィンターカップ最高順位である。その杉村も平成27年度で勇退、後任の指揮官には**市立船橋**（千葉）をウィンターカップ4位に入賞させた経験を持つ**廣田誠**が就任した。

近年は男子の新興勢力として、**浜松開誠館**、**星陵**、公立の**雄・伊豆中央**、そして現在**Bリーグ**で活躍する**波多野和也**が原動力となり平成12年にウィンター初出場を果たした**静岡学園**などが4強の一角に加わりつつある。なお静岡県の選抜予選形式が平成10年から決勝リーグの廃止、完全トーナメント制になったこと、平成13年からは地区予選を廃止し全県予選になったことを付記しておきたい。

最後に県選抜の名勝負を紹介する。異論があるかもしれないが記録や記憶の関係で比較的近年のものとしたい。女子は平成10年決勝の**静岡女子一市立沼津**。残り4秒で静岡女子・**大場里美**の劇的な3Pシュートが決まり逆転、指揮官・**柘植夏也**が渾身のガッツポーズで初優勝の喜びを表した試合は「結末のドラマ」という点で今でも多くの人々の記憶に残っている。また昨年はこの試合に勝るとも劣らない名勝負が生まれた。平成28年決勝・**浜松開誠館一駿河総合**。近年まれに見る実力伯仲のこの試合は一瞬たりとも目の離せない白熱した戦いとなり、試合終了20秒前に同点に追いつき、大会決勝戦史上初の延長戦に持ち込んだ浜松開誠館が粘る駿河総合を最後の最後に振り切った試合は47年間に渡る選抜大会・有終の美を飾るのにふさわしい戦いとなった。男子は第4Q残り15秒沼津学園が1点リード、興誠の1年生センター・**田中健介**が3Pシュートを決め土壇場で逆転に成功し2年ぶりの優勝を手にした平成13年決勝の**興誠一沼津学園**戦や、興誠がエース・**石原裕貴**を中心に最強王者・藤枝明誠相手に怒涛の追い上げを見せた平成20年決勝の**藤枝明誠一興誠**も捨てがたいが、やはり最後の最後までどちらが勝つかわからなかったスリリングな展開の試合として平成24年決勝の**沼津中央一藤枝明誠**を推したい。藤枝明誠リードの中、残り20秒で沼津中央・**望月孝祐**が逆転の3Pシュートを決める。藤枝明誠もわずかな残り時間を使って司令塔・**成田正弘**がドライブからゴール下に絶妙のパスを合わせたが、直後のシュートがリングに嫌われ万事休す。100-97の激闘で沼津中央が3連覇を達成した試合は、県武道館が最も揺れた珠玉の名勝負として今でも語り継がれている。